



### 「からゆきさん」の アンチ・プロ・バガンダ

日露戦争は、まさしく国民が、丸となって戦った戦争であった。ある日、戦地に赴く兵が馬車に乗ると、御者から「お国のために運賃は要らない」と告げられた。理由を訊くと、「皆がお役に立とうとしてゐるのに、自分は貧しくて寄附すらできない。せめて乗せた兵隊さんからお代を頂かないのは当然のこ

ん」たちは、黒煙を吐いて日本に向かう艦隊の姿を見ると、「このままでは、お国が滅ぼされる」と叫びながら、日本の商船を訪ねて情報を知らせた。また、シンガポールでは現地の日本領事館に駆け込み、貯金や着物、簪を「お国のためにお使いください」と差し出した「からゆきさん」もいたという。

そして特筆したいのは、彼女たちが行なったであろう、アンチ・プロバガンダ（逆情報）だ。バルチック艦隊は三月十六日にマダガスカルを出港するが、この時、ロシア軍には一つの不穏な情報が寄せられていた。すなわち、「日本の巡洋艦がインド洋で待ち伏せている」というものである。

どのような経緯で、ロシア軍がこうした情報を入手したのかは詳らかではない。しかし当時、赤崎以外の日本人でマダガスカルにいたのは「からゆきさん」くらいであったことを思うと、彼女たちが想ろになったロシア兵に吹聴したと

# 祖国のために…… 敵艦隊の動向を報せた 世界各地の日本人たち

日本海海戦は、決して軍艦に乗り込んだ男たちだけの戦いではなかった。極東へと向かうバルチック艦隊を、マダガスカルにいた日本の民間人が危険を顧みずに探り、また黒海艦隊の動きをトルコで事業を行なう実業家が報せた。さらに「からゆきさん」たちが、敵に逆情報を吹聴した可能性もある。奇跡の勝利の陰に、彼らの思いがあった。

## 平間洋一

元防衛大学教授

とだ」と語ったというのだ。当時の新聞にはこうした逸話が多く載せられている。明治人がいかに日本の行く末を案じていたかが窺える。とりわけ見逃すことができないのが、バルチック艦隊が迫っている様子を日本海軍に知らせた、海外在住の庶民の存在である。

一九〇四年（明治三十七）十月十五日にバルト海リパウ港を出港したバルチック艦隊が、アフリカ東岸、フランス軍政下のマダガスカ

ル島に寄港したのは同年十二月二十九日のことだが、その様子を見ていた日本人がいた。天草出身の三十二歳、赤崎伝三郎である。家業に失敗した赤崎は借金を返済するため、出稼ぎ先のマダガスカルでホテルを経営していた。彼はすぐ一大事と、すぐさま艦船の種類や隻数、さらには艦隊が積み込んだ石炭や水、食糧の量を極秘に調査し、急ぎインドのボンベイ日本領事館に電報を打った。赤崎はか

なり大胆な謀報活動を行なったようである。ロシア軍の中には「昨日貿易商人に装ひたる一人の日本人間諜、スワロフに乘込みたり（露艦隊来航秘録）」と語る者もいた。まさしく命懸けの行動だったが、赤崎を衝き動かしたのは、異郷にあっても変わらぬ愛国心だったであろう。外国の娼館に勤める「からゆきさん」もまた、バルチック艦隊の情報を本国に伝えていた。赤崎と同じマダガスカルにいた「からゆきさ

考えるのが自然ではないか。

もちろん、日本海軍の待ち伏せはなかった。しかし結果として、バルチック艦隊はこの情報に大いに翻弄される。史料によれば、彼らは数カ月間の航海において「日本の巡洋艦はいつ現われるのか」闇にまぎれて、水雷艇が襲ってくるのではと疑心暗鬼に陥り、砲をいづつも撃てるように警戒配備を敷いていたのだ。五月二十七日に對馬沖に到った時には、ロシア兵の多くは心身ともに疲労困憊であり、とても一大決戦に臨む状態ではなかったと思われる。

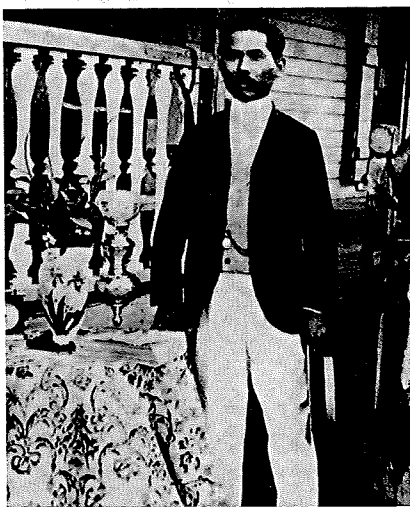
### スマトラ島と トルコからの情報

マダガスカルを出港したバルチック艦隊は、インド洋を通過した後、ジャワ（現インドネシア）のスマトラ島沖に差しかかる。この時、艦隊の動きを日本海軍に打電したが、三井物産の社員、津田弘視であった。津田は軍の密命を帯びてスマトラ島にいた。当時、三

井物産は天津、上海、香港、台北、マニラ、シンガポール、ボンベイに支店をもち、日本産の石炭販売を行なっていた。軍はその情報網を活用したのだ。バルチック艦隊がスマトラ島沖に現われたのは、四月五日。津田は、すぐさまその情報を海軍に打電したという。

一方、イスタンブールで事業を行なっていた実業家、山田寅次郎（宗有）は、トルコからロシア黒海艦隊の様子を伝えた。黒海艦隊が、すでに日本へ向かっているバルチック艦隊と合流するかどうかは、極めて重要な情報であり、政府が寅次郎に動向を探るよう命じたのだ。これを受けた寅次郎は、現地のトルコ

にとつて、この情報は有益であった。寅次郎は日本とトルコの友好親善の礎を築いた人物として知られるが、日露戦争においても祖国に多大なる貢献をしていたのだ。日本海海戦は、決して軍艦に乗り込んだ男たちだけの戦いではなかった。世界各国の「名もなき日本人」の活躍で、バルチック艦隊の接近を知ることができ、乗組員を疲労困憊させ、それが「奇跡の勝利」につながったのである。日本人が一丸となって大國ロシアに立ち向かわんとする当時の空気を、彼らの勇気ある行動から感じ取ることができよう。



タイトル上：明治頃の「からゆきさん」  
左：赤崎伝三郎（個人蔵）